

**\* ヘリオスコープなどの写真乾板取り枠収蔵**

2009年6月15日、旧図書館に陣取っている太陽グループの大先輩の入江 誠氏から、写真乾板の取り枠(プレートホルダー)をアーカイブ室にいただいた。1つはヘリオスコープ(写真1)と書かれている。これはかなり大型で恐らく「八つ切り」乾板用であろう。2つ目は2枚の乾板が入られる手札判用(写真2)のものである。これらの乾板の取り枠は、写真乾板はこの世から消えてしまったから、これから使用されることはない。



写真1 八つ切り写真乾板取り枠



写真2 手札判写真乾板取り枠

読者には、「八つ切り」とか「手札判」とかいても、どんなサイズか見当もつかないであろうが、最初に全紙と呼ぶ大きさがあり、半分に切ったものが半裁サイズ、1/4に切ったものが四切サイズ、1/6が六切サイズといった。そこで調べてみると、実際には比例尺ではなく、乾板の大全紙サイズは505×600mm、全紙サイズは455×557mm、半裁は354×430mm、四つ切は254×303mm、六切りは201×252mm、手札判は82×107mmとあり、八つ切りサイズは164×214mmとある（参考文献1）。この取り枠の乾板サイズは164×210mmだから、八つ切りサイズ用だと思うが微妙に違っている。また手札サイズは82×107mmとあるが、手元の古い手札乾板は81.7×106.7mmだから、これは切り上げて書いてあるようだ。

これらプレートホルダーにもいろいろな工夫が凝らされている。「八つ切り」用では引き蓋の残り2/3辺りで3箇所折れ曲がるようになっている(写真3)し、プレートホルダーの位置を8箇所別々に固定できる工夫(写真4)が凝らされている。また、「手札用」では一度に2枚の乾板を背中合わせに入れる工夫(写真5)と引き蓋を引いた蓋を後ろに折る工夫(写真6)が凝らされている。



写真3 引き蓋が折れ曲がる工夫



写真4 取り枠を8箇所固定する工夫



写真5 1個の取り枠に2枚の乾板を入れる工夫



写真6 引き蓋が折れ曲がる工夫

写真5の2枚の乾板を背中合わせに入れるための仕切り板には片側だけバネが付いており、2本のツメと1個の止め具で固定されるようになっている。これらの扱いは暗室という真っ暗な空間で行われる作業である。昔の作業を懐かしむのは歳を重ねた証拠であろう。

参考文献1：下保 茂：天体写真講座1 天体写真の基本 1975年